巴里郊外ベルサイユに滞在です。それで此の大先輩方の御來巴を機として、七月二十六日の夕、巴里日本人會で在巴里美校々友會を催しました所未曾有の盛會、二三の旅行中の人を除いて全部出席。

來會者は岡田三郎助先生、同令夫人八千代子様をはじめ卒業年次に書いてみますと、

○明治時代

平福　百穂氏（三二、日）　松岡　映丘氏（三七、日）
稲垣　吉藏氏（三七、彫）　藤田　嗣治氏（四三、西）
和田　季雄氏（四四、彫）

○大正時代

岡見　富雄氏（三、西）　角野判治郎氏（五、西）
鶴見　守雄氏（五、西）　遠田　運藏氏（七、西）
小泉　素彦氏（七、西）　鱸　利彦氏（七、西）
西村　叡氏（八、西）　頓野　保彦氏（八、西）
松岡　銀六氏（九、師）　長谷川路可氏（一〇、日）
山崎　良夫氏（一〇、日）　田口　省吾氏（一〇、西）
園部　邦香氏（一一、西）　佐分　眞氏（一一、西）
岡　鹿之助氏（一三、西）　和田　清氏（一五、西）
後藤　禎二氏（一五、西）　上田　幹一氏（一五、圖）

○昭和時代

山口　長男氏（二、西）　荻須　高德氏（二、西）
中西　利雄氏（二、西）　小堀　四郎氏（二、西）
藤岡　一氏（二、西）　荻野　映彦氏（二、西）
加山　四郎氏（二、西）　天野武吉郎氏（三、西）
三木　辰夫氏（三、西）　中井惣之助氏（三、西）
島村三七雄氏（四、西）　久保　守氏（四、西）
吉井　淳二氏（四、西）　手島　貢氏（四、西）
福井　謙三氏（四、西）　清水　啓三氏（五、西）
矢橋　六郎氏（五、西）

此の外家族として藤田氏令甥芦原氏、和田季雄妻仲子、田口氏夫人信子様、島村氏夫人フサノ様、その外二人

〔中略〕　八月一日

（『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第四号所載鈴川信一宛和田書簡）

和田は昭和六年六月十九日に帰国し、復職。同七年教授となり彫刻科彫刻実習授業を担当し、教務掛主任、生徒主事を兼任した。同八年、シカゴ万国博出品協会より日本館美術工芸部事務担当の依頼を受けて五月から八月にかけて渡米した後、九月三十日付で退官している。なお、和田は正木直彦の妻郁子の弟に当たる。

④ 巴里日本美術展覧会

昭和四年（一九二九）初夏、パリで日本美術展覧会が開催された。正木直彦校長をはじめとする本校関係者の尽力によるところが大きい。これについては黒田鵬心著『巴里の思出』（昭和三十一年、趣味普及会）や正木直彦著「十三松堂閑話録㈢巴里日本美術展覧会図録に序す」（『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第三号に転載）に詳し

く記載されている。『巴里の思出』に収録されている「巴里日本美術展覧会」は黒田鵬心が編集し、正木直彦の名によって発表された報告書である。それによると、同三年秋に仏国大使ロベール・ド・ビイから正木に右展覧会開催の申し込みがあり、政府も了承したので、左記の役員会が組織されて準備が進められた。

日本側名誉顧問

外務大臣田中義一、文部大臣勝田主計、駐仏日本大使安達峰一郎、外務省大使館参事官・侯爵小村欣一、侯爵細川護立、外務省情報部長斎藤博、東京美術学校長正木直彦。

仏国側名誉顧問

外務大臣アリステュド・ブリアン、教育美術大臣ピエル・マロー、美術次官フランソア・ポンセ、外務次官フィリップ・ベルトロー、駐日仏国大使ロベール・ド・ビイ

日本側組織委員

委員長正木直彦、委員竹内栖鳳、同結城素明、同津田信夫、同清水六兵衛、幹事田辺孝次、同・兼巴里派遣員黒田鵬心。

仏国側組織委員

ピラ（外務省文化事業部長）、デザロワ（ジュ・ド・ポーム館長）、組織代表エルマン・デルスニス、同ジェラー・フルマン。

陳列委員

委員長藤田嗣治、委員和田季雄、同矢沢弦月。

役員のうち、既出の正木の外に結城素明、津田信夫は本校教授。田辺孝次、和田季雄は同助教授。藤田嗣治と矢沢弦月は同卒業生で、藤田はフランスに滞在して活躍中であったが、矢沢は特にこの展覧会の用務を帯びて文部省から同地に派遣された。

出品作は日本画家、工芸家の新作と近代日本画の名品から成り、合計約四百点で、本校所蔵の狩野芳崖筆牧童、巨勢小石筆秋野鹿、橋本雅邦筆白雲紅樹、川端玉章筆墨堤春暁、小堀鞆音筆武者や細川護立所蔵の菱田春草筆黒き猫、横山大観筆生々流転なども含まれていた。

パリでは和田季雄、矢沢弦月、ピラ、デザロワ、デルスニスおよびその義弟フルマン、黒田鵬心、藤田嗣治らが鋭意準備にあたり、六月一日にリュクサンブール美術館の附属館にしてよく外国美術の展覧会が行われていたジュ・ド・ポームにおいて展覧会が始まっ

在巴里本校校友会記念撮影
（『東京美術学校校友会月報』第29巻第4号より転載）

た。七月二十五日の閉会までに三八、二二八人の入場者があり、新作のうち一一四点の売約がなされ、フランス政府が十三点を、パリとロンドンの日本大使館が計四点を買上げ、成功裡に閉会した。

⑤ 青山新の海外旅行

昭和四年七月十二日、助教授青山（のち和田と改姓）新は欧州、アフリカおよび西部アジア地方出張を命ぜられた。青山は明治三十二年五月七日大阪市に生まれ、大正十三年本校西洋画科を卒業し、翌十四年十一月から約一年間助手（美術史研究室勤務兼文庫掛勤務）をつとめて講師となり、「西洋彫刻史」授業を担当。矢代幸雄教授のもとで研究を続け、昭和四年に助教授となった。

旅行地、旅行目的等は左記の上申書案（「昭和四年職員関係書類庶務掛」に収録。七月八日発送）に次のように記されている。

案

教官外國出張ノ件上申

官氏名　東京美術學校助教授青山新

出張地　ソヴイエート聯邦、英吉利國、希臘國、土耳古國、埃及、西部亜細亜地方（パレスタイン、シリヤ、イラク）波斯國、印度

出張期間　昭和四年八月一日出發シ昭和五年三月末日迄ニ帰還スル豫定ニテ八ケ月間ナリ

出張ノ目的

助教授青山新ハ西洋美術史ノ専攻者ニシテ其ノ研究上古代ニ溯及シテ歐洲美術ノ亜細亜諸國ニ東漸シタル過程及反對ニ東方諸國ノ美術ガ歐洲ニ流入シテ種々ナル影響ヲ及ボシ相互的ニ交錯シタル脈絡道途ヲ考索討尋スルニ就テ前記諸外國ニ於ケル現存遺留ノ古美術品又ハ遺迹ヲ實地見学シテ史的考察ニ資シ寫眞撮影等ノ方法ニヨリ廣ク其等ノ研究資料ヲ蒐集セントスル目的ヲ以テ本出張ヲ要スルナリ

出張旅費　本校々館費ノ内ヨリ支給シ外ニ財團法人啓明會ヨリ研究補助トシテ若干ヲ給セラル、見込

右記述ノ事情ニ付青山新ニ歐洲其他各地ヘ出張ノ御發令相成度此段上申候也

年　月　日　　学校長

文部大臣宛

なお、海外旅券請求文書（七月十七日発送）案に添付されている青山自身の「海外研究旅行予定」には啓明会よりの補助費六千八百円を旅費に充てることと、次のような旅程が記されている。

（往路）シベリヤ經由

ソヴィエート聯邦　滞在一ヶ月

ポーランド　獨逸　白耳義　和蘭　佛蘭西

英吉利　滞在一ヶ月

スウィス　伊太利　チェッコスロヴァキヤ　墺太利　洪牙利　ユーゴースラヴィヤ

希臘　滞在一ヶ月